

室井 尚 Muroi Hisashi

■室井先生ご紹介

皆さん、こんにちは。だいぶ前の修了生の金谷です。たまたまこの春から室井先生のゼミ生になりましたので、私が室井先生のご紹介をさせていただきます。先生は今、横浜国立大学の方でメディア研究講座を担当されております。専攻は情報文化論、哲学、美学、記号論、メディア美学、あるいは芸術批評などもなさっております。著作はたくさんあるのですが、皆さんが一番ご存知なのは、当方の非常勤講師の吉岡先生と一緒に書きになった『情報と生命-脳・コンピュータ・宇宙』ではないでしょうか。皆さん本屋さんで買ってください。去年の4月、春に出ました『哲学問題としてのテクノロジー』、先ほど南さんも引用なさっておりましたけれども、私も今新幹線通学をしておりますので読みました。今、知は光なのだろうかという問いがありました。あちこちにたくさん問いがちりばめられておまして、心の琴線に触れます。泣けます。講談社メチエから出ておりますので、皆さんまたお読みになってください。あと、ホームページで先生は気前よく論文を公開なさっております。いつでもただで読めますので、どんどん引き出して読んでください。それから、翻訳書もたくさんございます。ヴィクター・バーギンの『現代芸術の迷路』という本がありまして、この後半の方の「芸術理論の終焉」を室井先生が翻訳しております。かなり説得力がありました。読んだ後でアートワールドのつくられ方がどうだったのかということがわかりまして、アートに関するイライラとかモヤモヤが一気に整理できますので、とてもよい本だと思われましたのでお読みください。

■講演

金谷さん、ありがとうございました。皆さんこんにちは、室井です。今日、「昆虫的想像力」という非常に変なかわいしいタイトルを出しましたけれども、今私は、

3つ4つのことで毎日忙しくしています。

僕は横浜国立大学の教育学部に92年に着任しました。その前は大阪の女子大で女の子と楽しく遊んでいたんですけれども、『情報宇宙論』という本を91年に書いてから、情報芸術といういわゆるゼロ免コースをつくるので来てほしいということで呼ばれました。専任は僕だけなのですけれども、全く教育学部のことを知らない。だから、教員養成ではないことをするはずなのに、やはり美術教育の美術教師の方に所属させられ、横浜国立大学の美術教育講座の教室の人たちと一緒に会議をやったりしておりました。僕はゼロ免という制度がどうしても納得がいかなかったので、そうとう1人で戦いましたが、学部長が幸い理解を示してくれたので、非常勤講師も非常に多くつけてもらいました。そして、ご存知の方もいると思いますけれども、4年前に何人かの人たちと一緒に教育学部を壊してしまいました。それで半分に分けて、残りを人間科学という、教員養成と全く関係がない課程に変えました。本当は2学部に分けたかったですけれども。

そのときに立ち上げた、マルチメディア文化課程という学科があります。前おやめになった学部長が非常に熱心にされていて、うちでは人事をずっと凍結していましたが、そのときに今までの旧学部のスタッフではない全く新しいスタッフを大量にとることができました。今我々がやっているメディア研究講座という講座には10人くらいのスタッフがいるのですけれども、非常にユニークな授業になっています。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、まず唐十郎さんをうちに呼びました。唐十郎さんは有名人というよりも、本当に普通の人ではないので、全く常識がないというか、だいたい8歳くらいの子どもの常識しかない人なんですけれども、僕たちがみんなでガードしています。とても国立大学の教授ということは普通にはできない人なんですけれども、機嫌よく毎週ゼミや講義をやっています。最近、唐十郎さんのゼミもようやく落ち着いてきてまして、ゼミ講

演を前期と後期にやる。それをやると演劇関係者が外から大量に見に来るわけなんです。唐十郎が過去の自分の作品を学生を使って再演するという非常に面白いことがおこっています。唐十郎さんに関しては、本当は別にそれだけで1時間か2時間くらい話したいくらい非常に多くのことがありまして、僕も今、ひとつ非常に自分でもかかわっているわけですから、唐十郎論を書くということをやりたいと、去年くらいから準備しています。

前に吉岡洋君がここで講演をしたそうですが、彼が編集長をしている『ダイアテキスト』という、京都アートセンターというところからでている雑誌があります。あまりメジャーな雑誌ではないので、取り寄せないと無いと思います。そこに初めて「唐十郎のこと」という20枚くらいの文章を、出したい本の序文のつもりで書かせてもらいました。それは、確か6月10日くらいに出版されるはずですが、非常に面白い人であるということに改めて認識しまして、5年くらいの付き合いなんですけれども、付き合いは付き合うほど、魅せられていく。本当のことをいえば4年前にはもう終わった人だと非常に冷たく見ていたんです。70年代に一番人気があったときに、ちょっとのぞき見て、こんなものかと。60年代の古臭いアンダーグラウンドですから、もう70年代以降こんなのは生き残れないだろうと思って、見捨てていた人なのです。ところが、見捨てていたわけですが生き残っていた。生き残っていたどころか、90年代、それから現在も年に2回新作演とか再演も蜷川さんを始めとしていろいろな人がやっていますけれども、40年近く同じスタイルで新作を書きつづけているというその凄さ、これはなんなのだろうというような状態です。その話は今日のテーマではありませんけれど。

それから他にも、うちには梅本洋一という、北野武であるとか、青山真司や黒沢清、こういう監督たちをヨーロッパに紹介してまわっている評論家があります。9年くらい前は、フランス映画だったらだいたい梅本洋一がテキストを書いていたと言われています。最近は唐十郎さんに刺激されたこともあって、今度は映画をつくってみたいということで、今はもう監督で入って、新しい日仏合作映画の監督作業中であるというような人もいます。

それから大里俊晴という、うちで一番ユニークな助教授がいます。80年代の頭に日本で初めてのノイズ系バンドをやっていて、アンダーグラウンドでものすごい人気があった「タコ」、それから「ガセネタ」という名前のバンドのリーダー的な奴がいます。このバンドは、80年代の初期においては、知識人や東京のミュージシャンに

ものすごい人気がありました。例えば、頼みもしないのに当時人気絶頂だった坂本龍一がセッションに参加してくれるとか、それから今はよくテレビに出ている香山リカが大学生のときに偽名をつかってレコーディングに参加していたり、それから細川周平という人が、外国語能力を駆使してレコードに参加していたりという、当時非常に東京で人気があったバンドだったわけです。けれども、それをやっていた大里という人が、その後バンドを辞めてパリに留学して、ジョン・ケージの本を書いたダニエル・シャルルという人がいる大学院に入って、結局学位を全然取らないで、パリでどこかに居候したままで戻ってきた。そんな人がうちの大学にいます。本来であったならば、ただの早稲田大学の普通文科卒のロックミュージシャン上がりという資格ですから、国立大学の給料査定だと一番低いほうになってしまっただけかわいそう。しかし、ものすごく面白い。

それから今年はジャクリーヌ・ベルントという、東ベルリン生まれのドイツ人で、日本のコミックを研究しているという若い女性がいます。ジャクリーヌは今、フンボルト大学と呼ばれているベルリン大学出のエリートで、日本文化をやっていたのですが、ベルリンの壁が崩れて、朝日新聞の通訳で入った。それで、日本に来て何に一番驚いたかというのと、やはり広告とか、ポップカルチャーとか、アニメとか、こういうものの氾濫に驚いたと。非常に驚いたわけで、それで日本こそがもしかしたら新しい文化を創る国なのではないかと考えた。日本のアニメとか漫画というのは、世界中どこを見ても無いからということで、彼女は変な意味での黄金の国日本に来て、部屋中漫画だらけで、週刊誌から月刊誌から全部の漫画を買って読んでいる。

別にうちの大学の宣伝をしているわけではないのですが、結構それが楽しいので、それが一つの忙しさです。

それから、僕は、日本記号学会というものを、割と長くやっています。すごくマイナーな学会ですが、この間まで編集委員長をやっていました。それで、『記号学研究』という雑誌を出しています。これは文系の学会で、学会誌を書店売りしているのは、今や日本記号学会だけという、非常にそういう意味では希少性のある雑誌なんですけれども、全然売れないんです。4月から僕が会長を押し付けられてしましまして、会長をやることになりました。それで、来週は岐阜で、吉岡君が実行委員長として第1回の学会をやります。

どうもその記号論というのが、今、全然元気が無い。

もう誰も記号論と言わない。しかし、今、流行っているカルチュラルスタディーズとか、メディアスタディーズなどは、もともと記号論な訳です。つまり、記号論が、基礎科学だとすると、そのアプリケーションとして、メディア研究だとか、カルチュラルスタディーズがある。だからOSと、Word、Excelの関係のようなものです。だからそのOSの記号論というのは、今誰もいなくなっているし、出版物も全然無いんです。昔の70年代、80年代の記号論入門とかいうのはありますけれども、全然新しい本が出ていない。だから、ちょっと記号論というのをもう一回、外に出したいので、今度は学会誌ではなく単行本で、『記号論の逆襲』というタイトルで、今年本を出すことになっています。「逆襲」というと、ゴジラの逆襲というように、だいたい一回敗退しているとか、もう消えてしまっているような感じがしますが。でも、ゴジラの逆襲というのは、本当は、第一作であればオキシゲン・デストロイヤーという、海中で骨になったはずのやつが、実は北極に現れたという話で、死んだと思っていたゴジラが出現した。それは別のゴジラだったのですけれども。そういうことを、今年やろうと思っています。これもちょっと微妙なところがあって、日本ではとにかく記号学会はとてもマイナーです。マイナーといってもちゃんとやっているのですけれども。健全経営の学会なんです。最近、ヨーロッパで記号論がすごく正論的になってきているという、非常に皮肉な現象があります。

記号論、それからコミュニケーションノロジー、つまり、コミュニケーション学です。それからインフォマティクスとか、全然アメリカやイギリスと学科分けが違う形で、ドイツや北ヨーロッパが中心となって、アメリカに対抗するヨーロッパの優越性をもう一度打ち立てるという方針というのがある。その中で、国際記号学会はものすごくメジャーです。特にドイツ、それからラテンアメリカ系がすごく強い。僕は、国際学会で理事もしているのですけれども、行くと、少し微妙に何か変な気持ちになります。なぜかという、日本ではもう全く認知されていない、もう本当にインディー系みたいなメチャクチャな学会なんですけれども、ヨーロッパに行くとものすごく制度化されていて、なんでも記号論でやっています。どちらがいいのかはよく分かりませんが、会長を引き受けてしまったからには、失敗するかもしれませんが、何とかもう一回立て直してみようかなというようにことをやろうと思っています。

あともう一つは、これはあまりおもしろくないのです

けれども、国際美学会というものが、8月の終わりに幕張で開かれることになっていて、何故かこれの手伝いをさせられています。国際美学会というのは、一応日本には日本美学会というのがあります。すごくつまらないし、めちゃくちゃ制度的な学会です。吉岡君もそうですが、僕たちは、制度的には京都大学の美学というところを出ているので、そこに組み込まれているのですけれども、本当だったらもうあまり顔を出したくないというか、すごくつまなくて抑圧的で制度的な学会です。要するに学会は、普通はポストを配分するための権力のシステムみたいなものです。戦後からとにかくそういう形でできましたから、この学会も記号学会もそうですけれども、後からつくられた学会のほうが面白いに決まっているわけです。だから本当に美学会なんていうのは、潰れてしまえばいいというくらい、つまらない学会なんです。ところが、これは先程の記号学会と逆で、国際美学会はメチャクチャ面白いのです。だいたい4年に1回くらい開かれているのですけれども、今まで3回くらいヨーロッパで開かれたものに行きました。行くと、メチャクチャ面白い。なぜ面白いのかというと、実は、美学というのは国際的には全く認知されていない領域だからです。ドイツやイギリスには、国内の美学会がずっとなかった。つい最近になってつくる動きがようやく出てきたし、他は全然ありません。なぜ美学会をやると人が集まってくるのかというと、やはりみんな勘違いをしている人たちが集まってくるのです。だいたい、文学研究者とか、絵を描いている人とか、何か美に関心がある人はみんな来て良いみたいな感じがあって、ものすごくケオティックでカオス的です。発表を聞いているとあまりにもレベルが低かったり、あまりに外れていたり、全然美学に関係ない発表をする人がいたりして、メチャクチャ面白い学会です。

それで、いよいよ今日お話ししてくれという4番目のところに入るのですけれども、実は横浜トリエンナーレというものが開かれるのですが、昨日は溜池の国際交流基金で記者会見をやっている様子で、それに出ていました。それでたまたまですが、ビデオを持ってきたので、その様子を見ていきます。これは、ただ記録を撮っているだけです。何の編集もしていない。さっきまで流すつもりはなかったのですが、昨日のことですので、ちょっとリアルかなと思ひまして。今しゃべっているのは、京都の国立近代美術館の河本信治さんという、キュレーターの1人です。結構、思ったよりは人が集まって、立ち見が出るような盛況でした。この人は、椿さんです。

僕がこの位置にいて撮っているわけですから、僕は絶対写っていません。これは、東芋ちゃんという、25歳の子がでているものを今やっているのです。

それからこれは、実は僕たちの今つくっているホームページです。今、konchuu.comというものをつくっています。ちなみに、konchuuは、uが2つなんですね。何故かという、konchu.comはすでに存在していて、これは鈴虫愛好家のサイトです。結構ドメイン名を取得するのも今は大変で、インセクトとかも全部つぶされています。これを見ながら説明したいのですが、一応ここに電光掲示板風ものが流れていて、少しコンセプトが分かるようになっています。まず、横浜トリエンナーレというものが一体何かということなんですけれども、僕は今ことほとんど喧嘩しているので、あまり宣伝したくないのですが、それは、日本で最初にやる国際的な現代美術展ということになっています。

ここに今いらっしゃる方はご存知でしょうけれども、ビエンナーレというのは2年に1回やる展覧会で、今年もベネチアビエンナーレというのがベニスであります。トリエンナーレは3年に1回やるということなので、トリエンナーレと名うってしまった以上、今回で終わりというわけにはいかないと。少なくとも第2回はしなくて



図1 The Insect World TSUBAKI Noboru + MUROI Hisashi

はいけないということで、非常にみんなプレッシャーがかかっているみたいですが、とにかくそれをやろうということになりました。理由はいくつかあって、まず韓国、台湾が東アジアでビエンナーレを始めてしまったということで、遅れをとってはいけないというか、日本もちゃんとやらなければいけないというものがあるわけです。

それから結局1980年代以降、バブルの時ですけれども、現代美術が国際的な競争力を持つようになりました。そのちょっと前まではものすごくマイナーで、絶対売れないし、美大や芸大に現代美術学科とか現代美術コースなどないですからね。ところが80年代後半から、唯一の美術となってしまったということです。これをやらないわけにはいかないだろうというのが、元にあったと思うのです。ところが、やはりタイミングが悪かったのですね。バブルのとき、10年前だったらこういうものもうちょっと盛り上がったのでしょうけれども、今こういうものに金を出す企業とか、やりたいところとかはないわけです。

予算規模もすごく少ない。確か6億円です。6億円というのは異常に少ないです。というのは、光州ビエンナーレが日本円に換算して1回目が15億円、2回目から10億円の規模で、台北ビエンナーレがやはり10億円でやりました。ところが今回は6億円でやると。この国際交流基金というのは外務省の団体ですから、国が半分、あと半分は横浜市が持つということになっています。それで全然お金が足りないの、今一生懸命集めているのですが、今、企業はどれも渋っています。すごく大きな会社でも、100万円とか200万円しか出さない状況で、すごくお金がない。だから、「やらなければいいのに」というのが正直なところなのです。しかも神奈川県は、もともと無駄遣いが多くて、もうパンク寸前です。実は、横浜市長はいっぺん降りられました。やはりお金を出せない、こんなことをやっている場合ではないと。サッカーのほうずっと大事だという感じで、降りたわけですが、たまたま石原慎太郎が都知事になって「横浜がやめるならうちでもらって、お台場でやろう」と言ったので急に惜しくなって、「やっぱりうちでやる」という風に横浜市長が取り戻したのです。

取り戻したのはいいのですが、別にお金が増えるわけではない。一応ここには最終的に110人が集まることになっていますが、なぜ110人集めなければいけないのか全く分からないのですね。最初25人くらいしか作家のリストがなくて、これでやればよかったのに100人で

やるってしてしまったから集めなければいけないという、訳の分からない理由でどんどん作家を増やしてって、最終的には110人になったのです。そういう企てなんです。僕は最近本当に思うのですが、国際交流基金とか横浜市とか役所がその文化を振興しようとする、本当にろくなことがない。唐十郎さんの所の劇団も、実はニューヨークにつれていこうというのを、僕は今やっているんです。2月にもジャパン・ソサエティ・ニューヨークに唐十郎さんと2人で行ってきて、国際交流基金や何かからお金をもらうのですが、今は、いくらでもお金が出るんです。ただばら撒きなんです。例えば新国立劇場というところで出している、芸文基金でもお金を出しますが、本当にばら撒きなんです。なぜばら撒きなのかというと、要するに、選ぶ人たちが自分の責任で何かを落としたりして恨まれたくないから、とにかくどんどんばら撒いていくわけです。結局、芝居なんかは、お客さんが入らなくても補助金をもらえるからできてしまうわけです。だから全くつまらない芝居をやって、それでお客さんは全然来なくても、文化庁からお金が出ているからできてしまうみたいなのところがあります。

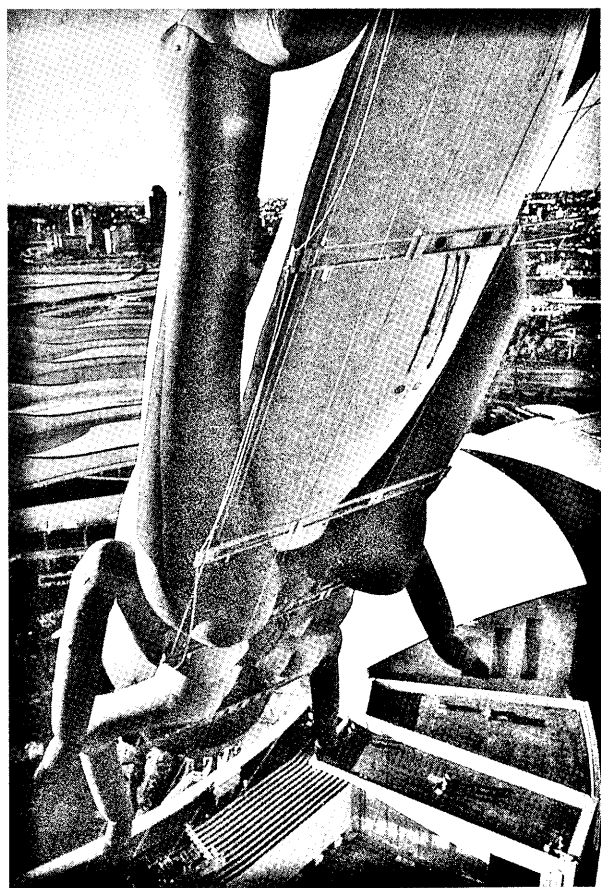


図2 The Insect World TSUBAKI Noboru + MUROI Hisashi

それで、横浜トリエンナーレもそうなんです。もう完全に役所主導です。特にダメなのが横浜市です。横浜市は、生活局文化部というところがこの担当なんですけれども、よくありがちのように、要するに他の部局と全く連絡が取れないのです。この会場が赤レンガ倉庫というところ、パシフィコ横浜というところがメイン会場なんですけれども、パシフィコ横浜というのは、一応別会社なんです。ほとんど横浜市なんですけれども、いわゆる第三セクターです。そうすると、パシフィコ横浜は、一日に会場使用料として、300万円取るのです。全然協力していなくて、ただ商売しているだけなんです。それで、もっとあきれたのが、横浜美術館というのがあって、これも、第三セクターなんです。そこに天野さんという仲良しのキュレーターがいるんですけれども、目の前でやるので彼は何か言ってくるのではないかなと思ってずっと待っていたんですけど、何も言ってこなかった。それで仕方がないから、もう間に合わないから別な企画を入れたんです。ちなみにその別の企画というのは、奈良美智展で、絶対こっちのほうが、人が入るだろうといわれている企画なんです。

というように、全く連絡が取れていない。しかもパシフィコから赤レンガ倉庫までの間は、今港湾局が大工事をしている掘り返している、泥まみれの歩道を歩いていくしかない。このように、はっきり言ってあまりかわり持ちたくない、どうしようもない企画です。それで、そういうふうに使っていたのですが、実は、さっき言った河本信治さんというのは、去年の春頃突然電話をかけてきて、「ずいぶん悩んだけど引き受けることにした、ついては室井さんに手伝ってほしい」と言っていたので、「あまり手伝いたくないんですけど」と言ったら、「そうじゃなくて、椿昇と組んで、アーティストとして、何かやってほしいんだ」と言われました。だいたいこういうのはかなりやけくそにならないと考えつかないアイデアですから、河本さんがやけくそでそういうのだったならば、売られた喧嘩じゃないですけども、挑発されたら買わなければ。それで、やってみましょうということになったんです。

そこから、本当に悪夢のような一年でした。まず、最初のうちは機嫌よく、椿さんと2人でみなとみらいでロケハンをしたりしてやっていたわけです。この前のプランを僕らが出したのが、去年の8月なんです。それで8月にいくつかプランはあったんですけども、CGで最初出したものがあるのでそれをお見せします。これは、絶対実現不可能みたいなものなんです、これ、65メー

トルのバッタなんです。ヨコハマ・グランド・インターコンチネンタル・ホテルという高層ビルに65メートルのバッタを置こうというプランを出したんです。ちなみに、この地点では、まだバッタは確定していません。河本さんが最初は「これはすごい」と言っていたのですが、ただ全然本気にしていなかったんです。「やっぱり最初はこのくらいインパクトがあるプランを出しておいたほうがいい、あとあと」、というような対応で、こんなことできっこないと本人は思っていたのですが、僕は、「もしかしたらできるんじゃないの、1年も時間があるんだから」と思っていました。だから、パシフィコ横浜と、インターコンチネンタルとセッションをしてみたいというふうに言っていたんですが、それから半年以上放っておかれました。河本さんという人は、非常にメランコリックな人で、もう降りようか、やめようか、とか、じくじく悩んで、鬱病になってしましまして、僕たちがメールを出しても一切返事をしなくなった。それで、12月にちょっと驚かせに行ったんです。僕の中では、1年以上時間が欲しかったんです。椿さんはやっぱり、アーティストだから最近ちょっと焦っていますけれど、僕は割と安心していました。ペインターみたいな人とは違って、現代美術のアーティストというのは、だいたいアート作品というものがどういうものであるかという、頭があるのです。そうすると、河本さんも典型的にそうですけれど、一ヶ月もあればできるというふうに思っている節があります。僕はアーティストではないので、例えばこの作品を出すときには、よくあるコラボレーションみたいに、僕がただコンセプトを出して、椿さんが実作をするというのが嫌だったのです。それは変えたい。哲学者とアーティストが組んで、哲学者のほうでコンセプトをつくって、アーティストがものをつくるというのは当たり前ですから、そういうものではないようにしたいと思っていたんです。だから、この作品のために1年かけていろいろプランを練ったり、それから本を出してもいいと思っていたので、僕の中では12月というのはもう本当にタイムアップの時期だったんです。それで、そのときに椿さんが萩美術館で作品をつくっていたので、そこまで押しかけていって、「もう待てないから河本に会って、駄目だったら降りるから」ということを伝えたのですが、椿さんはその時点ではものすごく余裕がありました。もしかしたら椿さんもこんなことできっこないと思っていたかもしれません。

それで、ずっと放っておかれた挙げ句、今度は1月から国際交流基金が入って、横浜市とパシフィコとの交渉

を始めたわけです。市もそうですし、結局ここは地主はパシフィコ横浜株式会社とこっちのコンベンションセンターが含まれたところを持っているのが、第三セクターの株式会社です。それで、インターコンチネンタルホテルも、インターコンチの持ち物だと思っていたら、そうではなくて実は建物は全部パシフィックの持ち物で、借りているのです。建物を借りて、営業をして、テナントとして入っているのが、ホテルなんです。だから建物の使用权はパシフィコ横浜という、横浜市の職員がだいたい出てくる。そこで、一応独立した株式会社であるわけだから、そこの担当者と相談したいと言ったのですが、「勝手に行ってもらっては困る。筋を通してやはり事務局を通してもらわなければ困る」ということで、国際交流基金と横浜市事務局の内部だけで3ヶ月間検討を重ねましたが、ずっと待たされていて、全然つながらなかったのです。やはりその時点でちょっとキレて、椿さんもさすがにだんだん頭に来て、2人で突然、河本さんが勤めている京都の美術館に押しかけていきました。そうしたら、「もし室井さんたちが降りるといったら、僕も今から降りることにする」というのです。

この企画の一番駄目なところは、キュレーターなんです。河本さん以外に、建島哲さんと、それから南條史生さんと中村信夫さんといいます。南條さんという人は、もともと役人あがりなのでちゃんとしているのですけれども、建島さんがチーフであるのにかかわらず、本当にどうしようもない人です。多摩美の先生で、僕は昔から知っているんです。ついこの間も、「今から辞めようと思っているのだけれど」というので、「あなたが辞めればみんなに殺される、アーティストや、周りの人がみんな本当にひどい目に会っている」といったくらい、どうしようもない。それで、駄目だと思っていたものが、動き始めたのが4月です。4月にパシフィコの担当者がようやく会ってくれて、実現の可能性を探っていきたい、実現できるのだったら進めていってもいいということでした。

その次に感動したのが、4月にインターコンチネンタルホテルの支配人、それから営業部長といったホテルの人と会えました。その頃から少し事務局の様子が変わってきました。僕らを見捨てておくのではなく、そのインターコンチネンタルホテルとのセッションの時には、事務局から6人も出てきたんです。さらに主催で入っている朝日新聞社の文化局次長の帯金さんという方と、横浜市の担当者がズラッと揃って来てくれて、僕たちが言う前から、横浜トリエンナーレの目玉として、事務局全

体としてお願いしたいといってくれたので、少し気分が和らぎました。こいつらもそんなに悪い奴らではないなというふうに、ちょっと嬉しかったわけです。意地悪く考えてみると、全く盛り上がっていないので、こういう話題になるものを出さないと、客が来ないのではないかと思ったのですけれども、とにかく、事務局がみんな応援してくれるようになりました。これはホテルですから、やはり対応は当然渋かったんです。それで、営業部長が、「うちも客商売なので、お客さんからクレームがつくと営業に差し支える。うちの女の子に聞いてみたら、みんな気持ち悪いと言った。もうちょっとかわいらしいものにしていただけませんか」と言われたので、「すみません、それではかわいらしいものとは例えばどういうものでしょうか」といいましたら、「例えば、イルカとか」と言われたので、「イルカではちょっと。昆虫ということでやっているの、ちょっとコンセプトが」というと、「それじゃせめて、てんとう虫とか、もうちょっとかわいらしい虫にしてもらえませんか」と、かなりしつこく言われました。駄目かなと思いました。ところが、椿さんがその時にかなりメチャクチャなことを言いました。

それからオーストラリアからすでに40人が、このバルーンが設置されている時期に、このホテルに泊まりたいという申し込みがあると河本さんから聞いたのです。本当か嘘か知りませんが、シドニービエンナーレというのをやっていて、シドニーでこのCGを見せたら、みんな喜んで是非ここに泊まりたいといったと言うんです。それでも駄目かと思っていたのですが、そうしたらホテルが意外なことに、次の週からはOKであると言うのです。なぜOKであるかという、その時に出席していなかった社長がいる。僕らも全然知らなかったのですけれども、インターコンチは、セゾン系のグループで、要するに西部の*堤せいじさんの義理の弟が社長なんです。それで、その社長に見せたら、メチャクチャ乗って、これは絶対に受けなければいけないということで180度変わって、もう完全にホテルは全面協力になりました。どこまで協力するかは今まだ折衝中です。

僕たちはただやらせてくれるだけではなくて、インターコンチに50万円のスイートがあるので、ここを貸してくれないかといっているのです。なぜスイートかというと、ここは謎の司令室というか、影の司令室があって、ここで監視しないと危ない。そして、学生とかが交代で監視をしたい。本当は泊まりたいだけの学生がたくさんいるのですけれども。何故、スイートですかというので、やはりこれは要するに、宿泊するのではなくて

事務室のようなものですから、やはり二部屋以上続いていると司令室の意味がないし、この位置だったらちょうどいいじゃないですかといっているのですけれど、ちょっと検討させてくださいと今言われているのです。それは当然だと思いますけれども、まだ決まっていません。

ホテルはOKなのですが、問題はバツタのことです。これは絶対不可能です。ここは海風も通りますし、風が強いんです。これは何かというとバルーンなんです。バルーンだと、コスト的にも、強度的にも納得できるだろうということです。しかし、このサイズは無理だろうということで、現在僕たちがやっているのは、37メートルという、このCGと比べたら半分の大きさですが、これもちょっと大きすぎます。これは45メートル案で、いろいろとやっているのですけれども、現在出しているこれは、下から見ると巨大に見えますけれども、だいたい縮尺はあっているはず。現実にはこのステージの部分にすっぽり入るようになります。つまり、できるだけ風の影響を少なくするというのです。これは最初、三重県にある中部アートという風船をつくる専門の業者さんに頼んでいたんです。そこの社長さんという人は、すごくユニークな人で、水木しげるの漫画に出てきそうな、そういう妖怪じみた感じの人なんです。それで異様にこのプランに乗ってくれました。偶然といえるかなんとか、親子三代、蛾の収集家であるという不思議な人です。その人がもう「何故、蛾にしないのか」とか「せめて蛹にしてくれ」とかいったんですが、何故、バツタなのかという理由があるんです。いつも、バツタをこういう風に持ち歩いているんです。バツタだけは、こういう風に置いて絵になる。例えば、先ほどのクワガタなんかは全部、上向けになると背中を向けることになります。ですから、こういう風に絵になるのはバツタである。それからもちろん、バツタ自体にも理由がいくつかあります。

それで、とにかく中部アートというバルーン屋さんが、どうやって、これを設置するかということで、見積もりなどをしてくれました。バルーン屋さんが考えたことは、上の方にワイヤーを引く滑車をつけてけん引きして固定するという方法でした。それからこのバルーン屋さんではバルブをつけて、風速が15メートル以上になると自動的に空気が抜けるという特殊技術がありました。これはいわゆる水素とかヘリウムではなくて、空気です。ドライヤーのような大きなものを使って、常に空気を取り込んでおくというわけですが、縮む時には自動的にそれが縮んでいくというわけです。ただし、縮んだり膨らみきるのに20分くらい時間がかかるというものでし

た。ところが、「じゃあ、これでいしましょうか」といった時にパシフィコ横浜設備担当の人が現れました。その人は実は横浜国立大学の建築の卒業生だったので味方してくれるのかと思ったら、敵に回りました。非常に手強い敵です。「こんなもので風に耐えられるはずがない」という、もっともな意見を出してきたわけです。自重1トンくらいになるわけですから、そうすると風速30メートルだと300トンくらいの体重を支えるワイヤーがないといけない。ですから、少なくとも横に数本のワイヤーを張らないととても持たないだろうと言うわけです。建物に傷をつけずに、金具を取り付けることはできないわけですし、そうなるとそこにワイヤーを張れません。そもそもこのプランには無理があるという、すごく当たり前のことを言ってくれたんです。しかし、盛り上がっている僕たちにとっては悪魔のようなことを言う人が現れてしまったわけで、これはどうしようかということになりました。

みんなでひどく落ち込みました。そして、何より落ち込んだのがこの中部アートのおじさんでした。この人は勘で作っている人なので、数字のことはさっぱり分からない人なんですね。今までは大きなバルーンはいくらでも作れたんです。例えば、ワールドカップ用に100メートルの龍も作っています。これはギネス級のバルーンであると言われていました。ただ、それはグラウンドにあげるだけだったので、バッタのように構造物に設置することはやったことがないわけです。バルーンというのはテントなどと一緒にですね。要するに構造物ではないわけですから、空き地とかそういうところであげるのは楽なんです。構造計算がいらないわけですから、このおじさんは、構造計算はできません。数字がまったく出せないおじさんなんです。それで、その人が本当に水木しげるの漫画の主人公みたいな風貌なんです。まるで漫画のように意気消沈して、来た時と帰る時にまったく違いました。これは、もう駄目なんじゃないかと、その時は思ったわけです。

そうしたら、そこから新たな展開もありました。たまたま僕は大学の入試用のパンフレットを作る広報委員長というものもやっているんですね。その中に学長の挨拶ということで、ものすごく堅苦しい文章と顔写真の表紙があったんですが、今回はこれをやめて、せめて私学でやっているみたいに学長と学生の座談会くらいやろうということになりました。それで座談会をしました。が、それまで僕は学長と全然、仲良くなかったんです。というのも、大学が大きいということもありますが、2年くら

い前に学長の悪口を大学の広報誌にたくさん書いた。大学の広報誌に学長批判を署名入りで書いたんです。それ以来、学長は僕のことをずっと嫌っているんじゃないかなと思っていました。ところが、学長と学生との座談会が工学部の高い建物であったものだから、みなとみらいが見えるんです。さらに、エレベーターで9階から1階までの非常に長い時間、学長と重い空気を過ごしました。その時に、エレベーターがシースルーになっていたので、「あそこに、45メートルのバッタができるんですよ」という話をしたんですけど、気まずい雰囲気に乗っていたわけですから、学長は「あ、そうなの」と言って、また沈黙したまま下まで降りていきました。「座談会の件、よろしくお願いします」ということで別れたんですけど、帰宅してから、どうしようかな、やっぱり無理かな、と思っていたら、夜中の11時に突然自宅に学長から電話がかかってきました。それで「室井さん、さっきの話なんだけれど」というので、「さっきの話って何ですか」というようなことを言ったら、「いや、バッタだけだよ、あれ、めちゃくちゃ面白いからさ、今日やった大学生との座談会と全部差し替えよう」、「やっぱり、こういうことをやっている大学の先生がいるという話の方がいいから」と言うんです。これは、もともと学長用のページでしたから、表紙と最初の4ページを使うことになったんです。

学長も夢中になってしまったんですね。それから2日後くらいに会った時にも、めちゃくちゃ喜んで、「こういうことは大学としても応援したいから」と、学長室で他の人がいる前で「今、学長が自由に使える研究費があるから、3千万出そうと思うんだけど」と言い始めた。周りの人は慌てて「そんなことをしたら大変ですよ、先生。ややこしい書類を出しても要求した研究費が半分くらいしか戻ってこなくて、みんなどこでも不満を言っている時に、大学とはまったく関係のない個人が参加していることに、そんな国のお金を使ったら駄目ですよ」と止めたわけです。学長は非常に残念がって「じゃあ、とりあえず室井さんたちに協力できそうな人を紹介しよう」ということで、いろんな人を紹介してくれました。

非常に面白い人たちばかりでした。まず、木下さんという人がいて、その人は文部科学省から天下ってきたキャリア官僚で、共同研究推進センターへ下りてきて、全国の大学の工学部の研究助成を全部握っていると言われていた人でした。そういう人は顔が広いだろうからといって会いに行って、このCGを見てもらって1時間くらい話しているうちにすごく夢中になってしまって、応援し

てくれると言うんです。この間KDDIっていう会社に協力をお願いに行きましたが、その時にも木下さんは関係がないのに何故か僕よりも先に行って待っていました。前日に「明日10時からKDDIビルで重役と会います」というようなことをお話ししたんですね。木下さんは、「僕は室井さんのこと全然知らないけれど、この間の僕のところに来た感じからいうと、とっても個性的な感じがして」と、僕が言い過ぎたりして相手の気分を悪くすることがあるといけないから隣に座って腿でもちょっと抓ったりしてあげようと、「勝手に応援に来た」ということでした。しかも、木下さんは話してみたら、カブト虫を自宅に120匹も飼っている。どうも昆虫ということで引きつけるものがあつたのか。それから木下さんとは僕が2年下でしたけれど、中学と高校が一緒だったとか、中学の時にプラスバンド部だったとか。そういうような訳の分からないような巡り会いがあつたりしました。

今、一番すごいのは学長が動いてくれたお陰で、「じゃあ、構造設計しようじゃないか」ということになれば、僕たちの工学部の土木研究室というのが日本でも有数である。しかも、明石大橋の設計をやったチームがうちにあると学長が紹介してくれるんです。それで、土木研究室に行って相談しました。そしたら、意外に面白がって、「模型を作って、風力実験をすればいいですよ」という感じで引き受けていただいて、図面まで書いておいてくれるんです。さらに驚いたのは、学長から、これは土木の研究費としてお金の補助が出るということでした。金額は通らないんですが、300万円。これは何かというと、風洞実験のためです。僕は風洞実験というのは模型を作ったりするんだろうと想像していました。そしたら、実はとんでもなく、ものすごいものなんですね。風洞実験棟というものがあるんですが、60メートルの風力、22.5メートルのタービン、整風のグリッドとか精密な装置があつて、そこに模型を作るということでした。そして、模型はバツタ100分の1,200分の1のものを作り、周囲の建物を全部、作るそうなんです。ですから、みなとみらいの丸ごとではないけれども、クイーンズスクエアぐらいからの建物の模型とバツタの2種類を作って、さらに延べ60人ぐらいのアルバイト学生が必要である。そして、模型を作るだけでも100万ぐらいかかる。そのような規模でやるというわけです。

とんでもない大がかりなことになってしましまして、風洞実験を取材に入つてほしいだなんて言っています。それから、椿さんが、あまりに毎日、面白いことが起こるので、インターコンチネンタルの人と最初に折衝した

ときのことも再現ドラマを作つてほしいとテレビ局でドキュメンタリーを作つてくれないかというようなこともしたりしています。また富士通の電光掲示板を提供してほしいとか、そういう交渉もしています。

そんな風にして、とても楽しくて仕方がないんですけど、先程のホームページもそうですが、今の僕たちのコンセプトは「モジュール」でできていて「中心モジュール」がバツタの飛行なんです。昆虫というのは、実にモジュール構造をしている。モジュール構造というのは、節足動物というのは基本的には、例えばムカデとかミミズって関係は同じような節によってつながっているんですが、昆虫は異節性ということがあるんです。要するに、頭部と胸部と腹部の機能が全部、分かれている。頭部というのは情報センターですね。もちろん食べたりもしますが、目だとか触覚だとか、情報処理をしていく部分です。それから胸節のところに羽とか足が全部くっついていて、運動系機能が完全に分化しているわけです。腹部においては、内蔵や循環器系というふうになっている。例えば、カマキリなどは、頭部をとっても全然、平気で動いています。それは、要するに、独立しているモジュールがくっついているからですね。昆虫はとてもしろんな体形や構造をしているわけですがけれども基本的には昆虫は三つのモジュールの組み合わせによって成り立っているわけです。

ですからモジュールという概念を持ち込んで、このバツタのバルーンは一つのモジュールであり、また他にもいっぱいモジュールがくっついているわけです。例えば、こんなに大きいのは実現不可能ですけども、メッセージボードも部分としてのモジュールです。それから借りる部屋もモジュールであるわけです。それから、他にも裏サイトをつくったりしているわけですが、そこではいろいろなグッズを作ったり、パッチやTシャツを作ったりしていることもモジュールです。その他にもシールをばらまくということも考えています。これは、例えば桜の町駅の人とか横浜駅のプラットホームの柱のところに貼っていたりすれば、誰でも関係があると思いますよね。そうすると、昆虫のシールもそうですが、昆虫の絵であるとか、全部がこれに関係のあるものに見えてくる。それは見えないネットワークでモジュールをたくさん持っているものであるというように考えることができるのではないかと思います。つまり、そのモジュールは僕たちが作らなくてもいいわけです。アートというのは作家がつくるものであるわけで、僕たちは作れない。それで、勝手にこのモジュールを、バツタを利用したいという人

が現われたらそれはオーケーというわけです。実はKDDIに行ったのもそういうことで行ったわけです。つまり、今時の企業はお金出してくれと言っても駄目です。どこでもそういう費用は削ることになっている。だから、そうじゃなくて利用してくださいと言った。それに携帯電話はどこかバツタに似ていると思いませんか。アンテナが触角で、電子昆虫のような感じですね。

こんなふうにして毎日、動いているわけですがけれど、次に、何故、昆虫なのかという話をしていきたいと思います。それは二つあって、一つはアイロニカルな、あるいはネガティブな感じで昆虫を捉える、つまりは文明が昆虫化しているということです。人間もある意味、昆虫化してきているように捉えられるのではないかなと思うんです。そういうアイロニカルな観点がまず一つある。例えば、我々は今、複眼を持っています。どういうふう持っているかという、カメラ、テレビのモニター、携帯の画面というように、たくさんの眼があります。いろんなものを我々は見えています。それから乗り物も昆虫的ですし、建物も、都市も昆虫的です。もう、ほとんどが蟻のような感じですね。それから、テクノロジーも昆虫的なテクノロジーですし、インターネットというのも常にそうであるということができないのではないのでしょうか。ウェブなんていうのも蜘蛛の巣のようなものですね。蜘蛛は正確には昆虫とは言えませんが、まさにテクノロジーがどんどん昆虫化してきているわけです。それに合わせて、人間もどんどん昆虫化してきている。

そのように考えた場合、昆虫って一体、何なのかというと、やはりシステムで動いているわけです。昆虫は、非常に精密につくられたゲノム、DNAに組み込まれた非常に精密なシステムによって動いている。

それで、人間もシステムが全てに行き渡っているわけですから、あまり自分で物を考えません。システムで物考えます。だから、DNAじゃなくて、文化的な遺伝子みたいなものが作り上げたプログラムによって我々は生かされていて、あまり自分の頭で考えませんね。自分の頭で考えているとみんなが思い込んでいるけれど、それは大抵、他所からやってきたものですよね。例えば、非常に強い信仰を持っている人が信仰のために死ぬと言ったときに、それは外の物に自分の命を捧げてもいいと考えているわけですし、イデオロギーに対しても同じことが言えるかもしれません。革命のために命を捨ててもいいというような考えもそうです。みんなが幸せになるんだったら、自分は死んでもいいというのは、すごく美しいみたいに聞こえますが、それさえも外から来たシ

ステムです。そういうものに支配されている。要するに、自由だとか想像力だというのが、もうほとんど不可能な状況になっているような、そういういきぐるしいシステムの乗り物にすぎないわけです。そうすると人間のあり方というのは、昆虫的というような言い方ができるわけですし、我々はそのようにしてすごくネガティブでアイロニカルな意味で満たされているような昆虫の帝国のなかにいると考えることができる。それは、昆虫のネットワークが全てを支配しているということです。しかし、アートですから、反対の意味を持ち出してもいいわけです。反対の意味というのは、こういう絶望的な状況の象徴としての昆虫を逆にひっくり返して見るということですね。逆に考えて、昆虫にもっとなっていくたならば、もしかしたら別な自由に出会えるかもしれないという、一種の超昆虫というコンセプトがそこにはあります。それは何かというと全く異種類の異種族の思考法、異種類の想像の世界の見方というもののシンボルとしての昆虫であるわけです。

例えば、複眼で世界を見るなんて絶対分らないわけですね。特に、セミなんかは複眼が二つあるだけではなく単眼が三つというわけの分らない眼の構造をしています。一体、セミはどうやって世界を見ているのか。そのことは分らないです。それから昆虫になって世界がどう見えるのかということも、僕の想像力の限界を超えています。想像できません。これが一種の思考でもあるわけです。しかし、昆虫的な視点というものは全く、非人間的で、怪物的なものかという、非人間的ではあるけれど怪物的ではない。何故かといえば、昆虫は地球で最も数が多い、一番、ノーマルな種族だからです。『虫の惑星』という本がありますが、節足動物を含めた昆虫類というのはこの地球上で、現在も人間とか哺乳生物とか、植物とか、あらゆる数を上回っています。1エーカー、400平米の土地には一兆ものレベルの節足動物が住んでいるという報告があります。ということは、要するに人間が地球上にせいぜい数十億、百億を超すぐらいだとしても、それに比べても、わずか400平米の土地にそれ以上もの昆虫がいるわけです。それが普通です。エコロジカルな視点で見ても昆虫はとても自然で、当たり前で、ノーマルです。むしろ脊椎動物の方が怪物的というくらい、昆虫は地球上から見たらノーマルなわけです。だから、この昆虫というメタファーは非常に面白い。異種類で、異種のものでありながら、なおかつ最もノーマルなものであるという二面性をもっている。

もう一つは、「子ども」ですね。子どもは昆虫好きで

す。何故、好きなのか分かりませんが、だいたいピカピカ光る虫ですとか非常に好きですね。そして、この子どもは、大抵、ネガティブに捉えられています。子どもは乗り越えられるべきであるとか、大人になっていくということが正しいとされる。つまり、進化とか進歩、成長という言葉には全て、子どもの未熟さ、あるいは動物性のようなネガティブなものとして捉えられているわけです。そしてこれが逆転すると、今度は逆に児童文学が意味するように何か理想化するような子どものイメージが作られる。天使のような子どもというものになる。しかし、子どもや幼児はどちらでもない。ちょうど、昆虫だったら蛹になる前の、いも虫のような、羽化する前がよく分からない感じ。それはいろいろ段階があるのではないかと思います。14歳くらいで初めて人間になるという見方もあるでしょうし、もう少し怪物的でもあるし、まさしく昆虫的な存在としての子どもというものがあると思うんです。

何故、子どもが光るものだったり、あるいは汚いものや昆虫を非常に好むのか、あるいは子どもの残酷さはどこから来るのか。最近、教育が行き届いていて、生き物は殺してはいけないというような抑圧がかなり小さい頃からあるわけですが、だいたい僕たちはバッタの足をもいだり、トンボを糸にぶらさげて遊んだり、蛙のおしりの穴にストローを突っ込んで膨らまして殺してしまったりしてしまいましたが、子どもをほんととそうすることしますよね。大人が「どうしてそんなことするの」と言って抑圧かけない限り、そういうことしますよね。楽しくてどうしようもないわけですから。しかし、それは大人になってからでは解消されない。そして、どうしてそんなことをしていたのかということは、絶対に解決されないわけです。せいぜい、「子どもだったからかな」というくらいです。何故、そんなことが楽しかったのかは自分でも解消できない。でも、普通の人には「どうして生き物を殺すのか、可哀そうだ」と言いますね。確かに、可哀そう。そして、正しいということが出来ます。しかし、正しいけれども我々の中にはそういう欲望があるんです。だからこそ、可哀そうと言ったとき、そういうことを全部隠してしまう。その意味では、生物としての我々はシステムの中で完全に窒息しているというように捉えることもできるわけです。しかしながら、そのような子どもとか幼児性みたいなものの中に、一つの自由があるのではないかと思います。美術的に言ったら、アンドレ・ブルトンとかシュールレアリスム第一宣言で言ったことのように、もう一度、一種の生命体と

しての子ども心というか、怪物的みたいなものに回帰するということが必要になってくるのではないかというメッセージがそこにはあるんです。

そこで、昆虫というのを出していくのは、このもう一つのポジティブな視点です。昆虫の想像力というのが、もしかして全く違ったメッセージがこのプロジェクトの中に含まれているということです。そういうことで考えたことをスライドで見ていきたいと思います。

さて、このプロジェクトはインセクトワールドということでやりたいと考えているんですけども、いわゆるポストヒューマンというような意味で昆虫的という言葉を取り上げてみようということです。昆虫は、人間的哺乳類的存在と大きくかけ離れていますが、地球上で最も成功した種族であるというように捉えられる。昆虫の特徴としては、いわゆる外殻構造や外骨格構造というような体節構造を持っています。脊椎動物と節足動物のみが筋肉を支える骨格を持っています。他は骨を持っていませんから運動能力がかなり低いです。しかし、昆虫と脊椎動物は、骨と骨に固定された筋肉という形で非常に優れた運動能力を持っているわけです。ところが脊椎動物と昆虫類は逆ですね。つまり、我々は内側に骨があって外側に筋肉がついている。ところが昆虫は外殻構造で、外側に堅い殻を持っていて、内側はドロドロです。大体、血管を持っていないので、直接、体液が体を通っている。そのかわり、筋肉は脊椎動物より強いんですね。蚤とかバッタの筋肉をみればわかるように、圧倒的に運動能力は優れています。しかし、脱皮していかなければ大きくなれないという根本的な欠陥を持っているということです。それから、先ほどお話したようにモジュール構造をしているわけです。

その他にも昆虫といたら、まず変態とかいったり擬態というのが出てくるわけですが、環境による変化があったりします。例えば、イナゴもすごく面白いんですね。中国やアフリカのイナゴが大発生するという現象はよく知られていますが「イナゴの日」なんていう映画もありましたけれども、あの種のイナゴというのは色が変ります。要するに、最初は食物の安定しているときには緑色をしていておとなしいバッタなんですけど、それが食物が足りなくなっていくと一斉に体の色が赤く変化していきます。そして、羽が発達してやせ型になっていきます。種ではなく個体に変化して、よく知られているように群れになって手当たりしだい食い尽くしていくというような大移動を始める。そういうふうに変化して個体でも変る。このような変態は、どう考えても不思議です。

さらに、いも虫と蝶では体の構造が全然、違います。非常に根源的な体の変化が行われている。それから、生活形態はもちろん多様で、擬態現象も多い。その他にもショウジョウバエが遺伝の実験によく使われているわけですが、ある人の本によると、もしハエの卵が1個も死なないで、全て生き続けるという仮定を計算すると3ヵ月間で、この地球全体が2メートルくらいハエで覆われるという計算になるそうです。海も含めてですから、ちょっと想像を絶している。要するに、昆虫の生命システムというのは99パーセントが死ぬという計算で出来上がっているシステムなんです。

もう少し、アカデミックな話をすると、『哲学問題としてのテクノロジー』という本で取り上げましたけれども、今、我々が直面している問題というのはテクノロジーの挑戦ということなのではないかと考えることができるわけです。コンピューターテクノロジー、これは人工知能の試みであるとか、あるいはネットワーク、バーチャルリアリティ。それから、チップを脳の中に直に組み込むという試みがなされていますけれども、そういったものが与える大きな文明による衝撃であったり、バイオテクノロジーとして人ゲノムですね。それからクローン人間。ES細胞は最近、胚幹細胞といって、要するに受精卵と同じように何にでも分化できる細胞です。だから、自分自身の細胞を取って置いて、内臓などに疾患があった場合、臓器移植の代わりになる技術として非常に注目されているわけです。臓器移植や脳死法案というのについてもこの技術が完成すれば、いなくなるわけです。あるいはナノテクノロジーも微細な領域のテクノロジーですが、確かに、これらのテクノロジーの発展によっていろんな可能性が出てくるわけです。こういうあり方というのは、結局、今までの我々が知っているテクノロジーとは全然違う領域です。つまり、自分自身を編集してしまうような感覚とでも言うことができるのではないのでしょうか。そのことをもっと一般的に広い見方で見てみますと、結局、我々は産業社会から情報社会という新しい文明の波を迎えつつあるということになると思います。1980年に出版され、ベストセラーになったアルビン・トフラーの『第三の波』という本があります。最近では、もう古い本だと思われているんですが、トフラーが言っていることは結構、今でも面白いんです。特に産業社会を支えてきた原則というものが、情報社会では無意味化するだろうと言っている。産業社会を支えてきた原則というのは、標準か専門か、極大か集中かといったものでした。つまり、これは全て工場モノを生

産するという産業社会の基本構造に結びついてたわけなんです。全てをスタンダードにしてしまう。例えば、TシャツならばSとMとLみたいに、あるいは9号とか11号のようにです。これは、よく考えてみれば人間の体というのはこの三種類しかないのはおかしいですよね。何号だとか言っていますが、それも全部、嘘ですよね。つまり、我々の体を規格に合わせているわけです。何故そうなったのかというと、規格化しないと大量生産にいくからです。コストもかかるわけですし、そうすると標準化が必要になってきます。

それから専門化というのは、要するに工場オートメーションラインを考えてみれば分かるように効率が良からです。例えばネジを回すだけの人、検査だけをする人、それから組立をする人というように分業の方が効率が良い。その方が大量生産には向いている。これは、大学も含めて、全ての知識構造の中で反映している原則でもあります。それから、同時化ということもあります。全員がシンクロナイズしているわけです。皆が時計をして、スケジュール通りに動いて、効率よく動くことを重要とする。それは工場が機械の電源を入れて、電源を切るまでを労働の時間としているわけですから、同じ時間に同時に働き始めないと効率は落ちるわけです。ですから、工場ではベルを鳴らしますよね。学校もそうですけれども、効率をよくするためには時間を決めて働いたり、お昼休みを同じ時間ととって、また同じ時間に働きはじめて、同じ時間に終わる。これが一番、効率が良いわけです。そのために、我々はパンクチュアルになってしまった。時間ノイローゼになってしまった。約束したデートに10分遅れただけで怒りだすようになりますね。

その一方で、よく言われているように産業化していない地域はとていい加減です。インドあたりの田舎だと二日くらい待っているのが当たり前だったり、約束して二、三日、道の真ん中で待っているのが当たり前というような生活をしているわけですが、我々は5分遅れただけでも怒りだす。それは、何故かということ、要するに生産効率を上げるためです。工場こそが生産の現場なわけですから、工場の機械に合わせて我々が時間を守らなければならない。だから皆が時計を持っている。それが同時化という意味です。ですから、コンビナートのように、工場が近くにあって集中していた方がいい。その他にも、集権化の効率性というものもあるわけで、権力は一カ所、つまり社長室のようなものがあって、そこで全ての権力を握っているというのが良いというような原則があるわけです。

トフラーによると、これが産業社会の原則であったのに、何故か我々はこれが普遍的な原則であると勘違いをしている。普遍的ではない。産業社会の原則は、むしろ情報社会では逆になってくるであろうとトフラーは言っています。さらに、この理論はフルッサーの理論ですけれども、結局、産業社会を支えていたのは機械のテクノロジーであり、それは重い物を持ち上げるとか、速く走るとか、人間の筋肉運動系身体のシミュレーションであったということが出来る。これが産業社会のテクノロジーであった。つまり、力とスピードのテクノロジーであったわけです。それが作り上げたものが工場での大量生産と、市場経済であった。そして、この中で近代的な階級社会の成立と自由な主体が誕生したわけです。つまり、機械の奴隷である労働者と機械の所有者であるブルジョアが初めて誕生する。それに対して、情報のテクノロジーというものは力とスピードのテクノロジーではなくて、認知系身体の外的シミュレーションであると考えられることができます。例えば、写真とかテレビ、ラジオというものは、決して筋肉の拡張ではない。そうではなくて、我々が物を感知して、それを情報処理する、そのプロセスがシュミレートされている。外的なシミュレーションをしているわけです。

その特徴としては、ソフトウェアとハードウェアの組み合わせという形になって、そこではプログラムが支配的になっている。そうすると、人間は装置のシステムの操縦、すなわち機能従事者にすぎないということになります。例えば、ビデオを持ち歩いていると、取り敢えず「今、あることを撮っておけばいいや」「あとで見ればいいや」と思うようになりますよね。それから、観光旅行しても、ヨーロッパに行っても写真を撮る。写真を撮っておけば思い出ができる。しかし、逆を言うと、写真がない思い出にならない。要するに写真機やビデオに自分の認知のシステムをあけ渡しているわけです。機械がやってくれるから、見なくても良いということになってしまうし、写真を撮ったら安心してしまいます。自分の目で見るということをしなくても良いのは何故でしょうか。写真を撮ったり、ビデオを撮ったりしてから、それで安心して土産屋に行って買い物をするよね。つまり、そのようにして自分で考えることを外の装置に代わりをしてもらっているわけです。コンピュータも基本的にはそういう装置ですよ。例えば「フォトショップ」というソフトウェアを使ってポスターを作っているときには、プラグインみたいなものが自分自身でものを考えたり、自分自身で書き換えをするような作業が全て代行

されるわけです。したがって、そこで我々がやることはシャッターを押したり、マウスでどこかをクリックするとか、メニューから何かを選ぶとか、そういう行為です。そうすると、一見、機械を使っているように見えるのですけれども、そうではなくて、いつの間にかそれは逆転している。つまり、カメラを使ってシャッターを押すということが、我々がものを見るということの代わりをしてきているわけですから、我々自身は何も考えない。何も見ないという状態を起してしまう。このような状態を作り出してしまうことがテクノロジーの特徴であるとフルッサーは言っています。

結局、情報社会というのは、先程のトフラーの話の逆が重要になってくる。要するに、規格化し、標準化するのではなくて、どんどん個性化・多様化していくというわけです。

だから本当は、Tシャツや服などは全部カスタマイズしてしまっている。インターネットなどのビジネスはそういうのが流行っていますね。要するに靴をつくるにしても、今までみたいに25だとか26のEだとか、ああいういい加減な規格に合わせるのではなくて、その人の足にしか合わない靴を安くつくる。規格でもなくて標準もない、個性化したものをつくっていく。そうすると、我々は規制のサイズのMや9号が着ることができなくても、ダイエットする必要がないんですよ。別に「9号のサイズが入る身体が標準である」というのは何の根拠もないわけですから、だから自分の体に合わせた服をつくって着ればいい。そのコストが下がっていくっていうことは、ネット社会にどんどん広がっていくでしょうね。

それから集中していったり巨大化していったりする必要もないんです。さらに同時的じゃなくていいんですよ。朝9時に学校に来なければならないというのは、これは産業社会のテクノロジーにおいて「正しい」原則だったわけで、今は違います。別に真夜中に働いても全然構わない。そのようにして今や世の中が、文明の形態が変わって来ているんですね。しかし、変わって来ているのに、相変わらず我々は、古いOS、古い枠組みしかもっていない。つまり、人間中心主義というフランス革命のときから200年くらい続いてきたOS、これしかもってないんです。

だからOSを乗り換えなければいけない。今までの近代的というよりは産業社会的な世界観の枠組みを別なものに変えなければいけない。ところが我々は相変わらずしがみついている。そのことが、今の一番の問題であると考えられるわけです。

それでは、どうすれば良いか。「パラダイムをかえましょう」とは言っても、パラダイムはそう簡単にかわる物ではないですよ。やっぱり、そこで必要になってくるのが、まったく違う視点ですし、それをここでは昆虫的な想像力という一種の不可能な課題として出しているわけですね。

そして、やはり自由って不可能です。我々自由ではありません。自由じゃないのに、あたかもみんな自由選択が出来るように思っている所に間違いがある。

「自由にものを考えましょう。」これは柄谷行人さんが『倫理21』などで言っています。この提言で何か変わるとは思いませんけども、これは当然の事で自由というものはもともと不可能なわけですから、「自由になれないんだけど、自由でなくてはならない」という、まあ一種の道徳的なものとして出てくる。それがこの「自由」という問題ですね。つまり、我々は自由選択してない。生まれてきたことも自由選択してないし、親も自由選択しているわけではない。だいたい誰でも大人は知っているように、我々は自由を選択してきたのではなくて、選択させられてきたんですね。消去法で選択させられる。出来るものは最初から数が限られていますから、就職しようか、大学院に行こうかといった時にも、「自分で決めたんだから、あなた自由に決めたんでしょ」という問いに対して「自由じゃない。だって、二つしか選択肢が無かったんだもん」というように、自由じゃない。

だから「自由」は、後から「私が選んだことは私が自由に選択したことなんだから引き受けなきゃいけないんだ」という、過去形でしか答えられないこのように、「自由」は基本的に不可能な理念です。したがって自由であること、もしくは自由な想像力などというものはどこにも存在しない。一種の不可能な超越論的な命令としてしか存在しない。子どももちろん自由ではありません。自由な想像力はどこにも存在しない。

ただ、先ほどの話に戻れば、さなぎ以前の密生状態にある昆虫としての子どもという捉え方がある。これは、「昔に戻れ、退行しろ」と言っているのではなくて、むしろ前進していくべき目標としてあります。

子どもであり続けることというのは非常に難しいことです。もしかしたら先程言った、唐十郎っていう人は今でも子どもなのかとも知れません。これは積極的な行為です。61歳になっても8歳の子どもとほとんど同じということは、欠陥ではないですね。血の滲む努力を通してしかそんなことは不可能ですね。60になろうが70になろうが、8歳の子どもの心を失わない、8歳の子どもと同

じということは、むしろ非常識このうえない凄惨なことなんです。

さらに、子どもであり続けることで、幼児であり続けることというのは、ある意味では、先程も述べたように、残酷さ、あるいは我々の社会システムを完全に破壊するような欲望といったものをもつような存在としての生き物である我々のありかたというものを、もう一度見つめなおすことによって、不可能な理念として自由ということがでてくるのではないかと思っているわけです。

さて、今日、題目に芸術というのが付いていましたけど、僕自身は1987年に『ポストアート論』という本を書いています。その時には、「アートなんていうものはとっくの昔に死んでいる。ないものについて議論しても仕方がない」ということを書きました。今でもあんまり変わってません。60年代でアートは明らかに死んでいます。アートに関係ない絵なんて幾らでも昔からあります。そして、アートは明らかに近代的なイデオロギーのもとに、少なくとも印象派以降、モダニズム以降の物語として1960年に終わった。終わったものについて議論しても仕方がないし、本当のアートなどというものはあるはずがない。今、問題なのは、終わったにもかかわらず、制度だけが残っているということです。神殿だけが残っている。美術館もそうですし、文化勲章という形で残っています。文化と言うとどんどんお金が出ますし、美術館を建てる時でも誰もほとんど反対しません。文化的なことをやろうって言うとみんな反対しないわけです。ところが、中に入れるべきアートなんてどこにもないから、仕方がなくマンガの展覧会をやったり、三宅一生などファッションデザイナーの展覧会をやったりします。あれは美術館でやるから意味ありげに見えますけれども、違う場所でやったら、ただのファッションショーにすぎないものです。あるいは、先日、水戸美術館でテレビゲームの展覧会の講演をしたんです。テレビゲームの歴史を美術館で見るというもので、テレビゲームが美術館の美術展になったのは初めてのことで画期的なことであるということでした。それでも、来ていたのは本当に小学生だけでしたね。要するに、入場券がコインになっていて、中に置いてあるパックマンとかの全部のゲームがそのコイン一枚で何回も遊べるというすばらしい企画だったんですね。そこで、ICCの副館長やった中村敬治さんと、「メディアアートなんて」というわけのわからないトークショーをやったんですが、その時凄く寂しかったです。講演室の向こうでは小学生がピコピコとゲームやっているし、最初からいた人達も中村さんが凄く暗いアートの

話をし始めると帰ってしまうし。僕が話し始めるころには、5人くらいになっていて、もう止めてみんなでゲームしませんかという感じだったんです。

話をもとに戻しますと、アートについて議論しても死んでいるわけですから仕方がない。ただ、残っているものがあるから、今重要なことは廃物利用としての、つまり「口実としてのアート」です。このことは国際会議でも発表したことがあります。勝手に口実として使っちゃう。今度のインセクトがいい例です。完全にシステムに寄生して、それを口実として使います。そこで、面白い、とんでもない提案をできる、利用する、というそういうかたちでしかアクセスできない。だから真のアートだとかいわれても、真もへったくれもなく、既にゾンビなんです。廃物を有効利用することを考えていけば良いというのが僕の発想です。ちなみに河本さんという人が基本的にそういう発想なので、今回のセクションもだいたいそうなっています。ただ、逆に今、そういう状況がひとつのシステムになっている。例えば、小沢剛などは、完全に利用しているとしか思えません。「つまらない人たちが弱体化したアートの制度を利用している」ということが非常につまらない。そうではなくて、面白いことに廃物利用をすべきであると思う。

ただ、小学校の先生も大学の先生も一緒だと思いますが、今こんなことをやっていると、集まってくる学生達のなかに、何だかとても動物的なものを感じることがあるんですね。何かすごい変な欲望が動いていることとがありますね。ところが、やはりそれが表に出てくると、全部システムになってしまう。例えば、今回の企画も一応ワークショップという授業にして、「これ手伝ったら単位だすよ」と言ったならば、もうすっかり単位のことが気になって、一緒にレポート出さなければとか、アイデア考えなければとか、完全に課題になって、自分の中で泥沼化しているのでつまらないんですよ。めちゃくちゃなことを言っはこないですからね。それから、学生に凄く怒ったのは、「私はもうこのことに夢中ですから」と言っているわりには、誰一人としてこのプラン始まってからみなとみらいの現場に行かないということです。そんなことまでする必要がないというふうに最初自分の中にブレーキがかかっているわけです。「私は一生懸命やってる。授業のために一生懸命やってるし、先生のところにもいつも行ってる、アイデアも出してる。どこが悪いんですか」というような気持ちの持ち方が既に悪い。要するにそれは、先生に言われたからとか授業だからとか他のことよりは面白いだとか、最初から枠つくってそ

の中で自分は頑張っているからそれで十分だと思っていて、完全にそこからはみださないというわけです。だから、勝手にやってみたり、僕に怒られることは絶対しないですね。だから、本気で夢中になっていないんですよ。要するに、学生たちは授業じゃないと来ないとか、単位にならないと来ないという風に、自分では何も考えていない。クラスだとかガイダンスだとかそれから、時間割りだとかそういう枠がないと考えられない。つまり、全部そういうものに縛り付けられてる。それは小学校でも中学校でも基本的には同じだと思います。それは、絶望的でどうしようもない。

確かに、みんな職場で頑張るって言いますけど職場で頑張るにも限界があるだろうと最近では思っていますけど、いっぺん全部潰れないとダメなような気がします。やっぱり基本的には国のこと、全体もそうですけれど、今までやっぱり利権を持ってやって来た既成の権力を持った所がなかなか動いてくれませんか、つい我々騙されてしまう。例えば、小泉内閣が90パーセント以上支持されているという。しかし、90パーセントというのはいったいどこにいるのかと気になっているんです。要するに、森のときには、逆に90パーセント不支持でした。だからといって小泉だから何が違うか。なんでそれが90パーセント支持なのか。身の回りの人に聞いてみると僕の周りには90パーセントなんてどこにもいない。どこに90パーセントいるのかわからないんですけど、90パーセントが反復強化されていってしまいます。学生なんかはほんとくとすぐ支持にまわってしまいます。これだけ国民が支持しているのだから、完全にメディアに支配されてるから、「イヤー。久米宏も言ってるし、みんなテレビで小泉が凄いとやっているんだから、やっぱ凄いいんじゃないんですか」と何の根拠もないことを言い出す。ああこれが90パーセントなんだなって思います。みんなそれで洗脳されてしまう。もう絶望的ですね、日本は。

それから週末新宿とか渋谷とか歩いていると、そのほとんどがもう15歳から20歳ぐらいでしょう。何十万人も。それを見ていると爆弾落として、一挙に殺してしまいたいって思うんですけどね。今、渋谷で遊んでいるのは、ほとんど中学生ですからね。週末は家に帰らないで朝まで遊ぶということを、親が黙認しているわけだから、どうしようもない国になっているんだなという気がするんですよ。

だから、大学もダメですし、学校もダメですが、その中でしぶとく生き延びるためにはどうしたら良いかということを考えていくと、我々も職場だとか生活だとか家

庭を守らなければならないいろいろな抑圧されて社会の中で生きていますが、しかしこれだってよく考えると、ちょっと前まで昭和30年代くらいまでこんなに不自由じゃなかったですよ。めちゃくちゃ貧乏していても、大体にして生活シンプルでしたしね。僕は昭和30年の早生まれですけど、そのころの山形では、裏の川でみんな洗濯していたり、沢庵石を拾って来たり、凄くシンプルな生活をしていた。だから最近では、ああいう時代に戻っていくのも、なんかサイクルが完結してちょうどいいなと思うんです。だってみなとみらいもそうですけれども、大阪の南湊の巨大な埋め立て地とか、馬鹿みたいなビルを見ると滅びるなと思いますよ。とにかくいっぺん、チャラにならないとだめなんじゃないかと思います。都会は本当にそうですし、本当は地方と都会のヒエラルキーなんて無くなっても構わないですよ。つまり、集権的でなくてもいい。独立したっていい。世界情勢を見ても、例えばソビエトが解体してみんなバラバラになったことによって、もともとロシアって無かったってことがはっきりしてきた。例えばロシア文学を代表する作家といわれているような人たち、ツルゲーネフとかゴーゴリとか、みんなトルコ系です。スターリンだってそうです。だからロシアなんてないし、今、バラバラになってどんどん小さな単位で国が分かれていく。

もうどこでもそうです。以前、国際美学会議の時スロベニアに行きましたが、スロベニアとかクロアチアとか旧ユーゴなどは、もともと国ではないですから、もうどんどん国家や集権制ではなくなって、分散的に変わっていく。しかしながら日本は相変わらず、中央集権で官公庁がすべてを支配している。教科書の内容も、相変わらず文部省が検定で決めている。しかし、そんなことしなくてもいいはずですよ。だって、そもそも文部省なんていない。だから文部省は、検定試験するだけにすればいいんですよ。中卒資格、大卒資格みたいな検定資格試験をする役所になってしまって、あとはその資格を目指してみんなが勝手なことすればいいですよ。カリキュラムとか時間割とか、塾みたいに勝手にしてしまって、検定をパスすればいい。パスした生徒がいっぱいいい学校がいい学校という風にしていけばいいのであって、別に教科書なんていないし、指導要領なんていうものもないと思います。

しかし、そうはならない。ならないからこそ、生の内部にいながら一人一人のレベルで戦っていくしかないのだと思っています。